

80歳になる前に思い切って免許証を返納し車の運転を止めた。楽しかったドライブを回想して懐かむ反面、時には車がない不自由さをかこつこともある。

一般的に日本では車は左側通行のため、国産車は右ハンドルである。しかし、イギリスを除く欧米では車は主に右側走行のため左ハンドルである。どちらが運転しやすいかと聞かれれば、日本のように左側通行の車道では右側にセットされている方が運転しやすい。だが、慣れてしまえば思っていたほど苦にはならない。車の流れに沿って走れば、ハンドルが右か、左などはあまり意識しなくなる。海外でもこれまで随分車を運転してきたが、今も印象に残っているのは、長らく関わっていた旧厚生省の太平洋戦争戦没者遺骨収集事業で現地滞在中に、専用車を運転して厳粛な気持ちで戦没者のご遺骨を運んだことである。

しかし、高級スポーツカーでの忘れられない思い出もいっぱいある。半世紀近く前ニューヨークに会計士の友人と、真っ赤な高級スポーツカー「コルベット・ステイングレイ」を共有していたことがあった。普段は、在米の友人が自由に乗り回していたが、私が訪米した際は、私が優先的に利用できることと約束していたので、時折訪米して時間的に余裕がある時には、誰も目を瞞るあのスポーツカーをひとりドライブして楽

しんだものである。

アメリカでもあの真っ赤で派手なスポーツカーは多くの人々から関心を持たれ、駐車場に停めて彼らから誰の車だ?これからどこへ行くのかと尋ねられたこともある。ボストン近郊のモーターに泊まり部屋の近くに駐車した時には、唐突に警察官がやって来て「あなたの車か?」と聞かれ、そうだと応えるとここは狙われやすいので、人目につかない場所に駐車できるように支配人に交渉してあげようと親切に対応されたこともあった。

ある時、そのスポーツカーに乗って高速道路の出口で料金を支払おうとした時、あまりにもシャシー(台車)が低く、運転席に座ったままでは料金箱に手が届かず、つい横着をしてコインを投げたところうまく入らず、地面に落ちてしまった。それを見ていた係員が寄って来て、なぜ投げたりするんだと怒った。箱へ手が届かないので、仕方なく放り投げたのだと話したところ、彼はコインを拾い上げながら箱に入れ、忌々しそうに「スチューピッド!(馬鹿者!)」と言われてしまった。この時、新たに知ったことは、運転席が低いと車道とぴったりが感があり、運転は思ったよりし易いのだが、このように不都合なこともあるということである。

普段滅多に乗る機会のない高級スポーツカーだが、外見と乗り心地は快適でも実際に試乗してみなければ、その良さも、不自由さも案外分からないものだ。

(エッセイスト 近藤 節夫)